

グラフィーティ
予備校graffiti

ー 私が出会った青春（三） ー

目次	ページ
・ ⑪ O君、裁判員制度と「静かな革命」	
PART I	2
PART II	3
・ ⑫ S君を凍りつかせた「市民の冷たい眼」	7
・ ⑬ 音楽を愛する若者たち、そしてドストエフスキイ	10
(A) 音大生Kさんとバッハと聖書	11
(B) ドストエフスキイとベートーヴェンから響いてきた声	12
(C) 調律師P君が聴き取った世界の「不協和音」	13
・ ⑭ お母さんの「永遠の生命」を求める青年	16
・ ⑮ 「てっちゃん」の冒険	18
・ ⑯ セブン・イレブンで見る「夢」	20
・ 予備校 graffiti ・ ⑪～⑯ ・ 余録	21
・ 予備校 graffiti ・ もう一つの「青春」 ③	23

予備校 graffiti ⑪

○君、裁判員制度と「静かな革命」

毎回ここに紹介する人たちは、プライバシーを考慮して、その氏名を頭文字や愛称で表記させてもらっていますが、今回の⑪と⑫の○君やS君の場合のように、その紹介の内容が非常に公共性の高いもので、またその内容について皆さんに広く知って頂きたい場合は、その出版書名や出演したテレビ番組名等はそのまま記させて貰います。

PART・I

★○君は、大学の四年間を通じ、河合文化教育研究所のドストエフスキ研究会に出席を続け、ドストエフスキと福沢諭吉とに一所懸命に打ち込んだ点で見事でしたが、更に注目すべきはその正義感と行動力で、日本を変えるためには政治を変えなければならないと、彼は親しい友人たちと共に、(その一人が次の⑫で紹介するS君です)、STATESMAN という学生集団を立ち上げたのでした。

★○君やS君たちは、まず市議会議員や都議会議員や国会議員に立候補した人たちの中から、「これは！」という人に見当をつけることから始めました。次にその候補者たちに対して、彼ら若者が抱く問題意識を質問状や公開討論の場などでぶつけ、これは自分たちの夢や問題意識を受け止めてくれる人だと判断すると、今度は手弁当でその選挙応援をし、当選の暁には協定通りの政治活動をするかどうか厳しいチェックを続けるのです。彼らはどこかの政党や政治家の「ヒモつき」になることを極度に警戒し、independence (「独立」「自立」「中立」) を貫くため、自分たちでアルバイトや商売を始め、様々な面で相当の成果を上げてゆきました。その純粋な姿勢は、しばしば新聞やテレビにも取り上げられるに到りました。

★しかし何よりも私が驚き胸を打たれたのは、○君自身が都議会議員の候補者になって、ほぼ確実に次の選挙で当選するだろうと思われていた矢先、突然全てを投げ捨て、司法試験の勉強生活に入ってしまったことです。政治の世界から司法の道へ。この事情について、彼は詳細を語りませんが、政治の醜い面を見させられたのではないのでしょうか。またこれも私の勝手な推測ですが、彼は自分が本格的に政治の世界で活動するためには、高い理想と共にもう一つ、高度で現実的な智慧と力を身につける必要が

あることを痛感したのではないのでしょうか。また彼が政治活動をしている時、ハンセン氏病の人々が強いられた過酷な歴史について知り、改めて社会正義の問題に法的な角度から取り組むことの必要を痛感させられたことも大きかったようです。(ハンセン氏病の問題については、次々回の⑤でK君を紹介する際にも、再度取り上げることになるでしょう)

★O君は法学の伝統を誇る大学の出身ですが、司法試験への準備に当たっては、地方の或る大学の法科大学院を選びました。ここは司法試験の希望者を寮に入れてくれる上に、授業料も免除してくれるため、誰にも負担をかけずに済んだのです。三年間の音信不通——良き師に恵まれ、猛勉強の末に見事に司法試験に合格した彼は、今は人権派と言われる或る法律事務所で活躍をしています。

★竹を割ったようにスッキリとした性格で、金や権威や名声に左右されない正義漢のO君は今、弁護士としての仕事以外にも大学で憲法を教え、3・11の救援活動や、築地の豊洲移転問題や、裁判員制度の追跡・検証の作業等に打ち込んでいます。その活動が認められ、衆議院の法務委員会で「裁判員制度」に関する意見の陳述を要請されたり、テレビでコメントを求められたりする等、彼が社会正義のために休みなく働き続ける姿は世に広く認められつつあります。奥さんやお子さんにも恵まれ、O君はあらゆる面で今、正に「働き盛り」にあると言えるでしょう。

PART・II

★このO君やS君たちが追跡・検証をしている「裁判員制度」について、皆さんにも是非知って頂きたいと思います。2009年の5月から始まったこの制度は、市民が裁判所から *at random* に選ばれ、刑事裁判に参加を要請される制度ですが、O君たちはこの裁判員制度が日本の裁判制度において如何に機能をするのか、またこれが裁判員となった人たちに如何なる影響を及ぼすのか等について、一般社団法人「裁判員ネット」を立ち上げ、モニターやフォーラム等を繰り返し、追跡・検証の作業を続けてきました。そして開始から10年、既に約9万人もの市民が裁判員としての体験をした現在、彼らはこの制度が、様々な点で非常に大きな意味を持つという結論に至ったのです。

★この報告については、O君自身が既に様々なテレビ番組やラジオ番組で的確に解説をし、また最近友人のS君たちと共に上梓した著作で詳細に報告をしています。

- ・NHK「クローズアップ現代」、2019年1月23日放映
- ・『裁判員ネットライブラリー、あなたが変える裁判員制度
— 市民からみた司法参加の現在』、同時代社、2019) 他。

それゆえここでは、O君やS君と私との関係という点から、また「予備校 graffiti」の趣旨からも、この制度が他ならぬドストエフスキイ世界と深く関わるものであることに焦点を絞って記そうと思います。(以下の本文における引用は、上記の著作からのものです)。

★O君たちが指摘する「裁判員制度」の最大の特徴は、市民が犯した罪を、裁判官たちと共に、同じ市民が裁くという所にあると言えるでしょう。この事実から何が生まれてくるのか——O君たちによれば、裁判員となった人は、それまでの日常意識から大きく外に踏み出すことを強いられます。それまで全く知らなかった他人の犯罪と、突如正面から向き合わされるのです。つまりその犯罪そのものの詳細を知らされ、その犯罪の背景・原因について考えさせられ、最後には犯罪者に対する（死刑をも含んだ）刑罰を課すことまで要請されるのです。このように裁判員制度とは、市民をして他の市民の犯罪に向き合わせ、このことによって「強烈に、そして深く個人の内面に影響を」及ぼす可能性を持った制度なのです。かくして「普通の場合とは違う」「人の一生がかかっている」場に立たされ、裁判員の役目を果たすことを要請された人たちは、漸くこの任に耐えたとしても、評議内容の安易な口外は禁じられていることもあり、この体験がその後何時までも「トラウマ」のように心にのしかかり続ける危険も少なくはないのです。

★その一方でこの体験は、人に自分が「社会の一員であるという認識」を強く与えること、つまり自らが他者と共に生きる社会的存在であるという自覚を与え、社会が宿す「病」に対する市民的責任感を目覚めさせ、また市民としての主体性を育むという、極めて積極的な面を持つことも明らかとなってきました。O君が出演したテレビ番組や上梓した著作には、実際に裁判員となった人たちの体験談が豊富に報告されています。今までこの制度に余り馴染みのなかった人も、是非その生々しい報告に触れ、この制度が持つ豊かな可能性について知って頂きたいと思います。

★O君やS君たちの報告に触れ、また様々な人たちの体験談に触れて私が感じさせられることは、法の定めた新制度の下で、一つの「静かな革命」が起こり始めつつあるということです。敢えて大袈裟な表現を用いますが、裁判員制度への参加を通じて、日本人は市民としての成熟、つまり真の主体性と自律性獲得に向けた、一つの「意識革命」を開始したばかりではなく、更には「ドストエフスキイ体験」とも連なる「魂の革命」に向かい、一步を踏み出したのだとさえ考えられるのです。しかもこの革命は、繰り返しますが、政府が管理する司法制度の下で粛々と進行中なのです。

★周知の如くドストエフスキイ世界とは、殺人者を始めとする犯罪人やテロリスト、売春婦や好色漢や姦通者、酒飲みや賭博者、そして病人や精神異常者や宗教的痴愚等々、健全な市民的常識の枠を逸脱した「異常者」たちがひしめく世界であり、読者はその「罅を超えた」人間たちの思考や行動が産む激しいドラマに巻き込まれ、そこから自分自身の旧き小さき世界を解体させられ、遂には主人公たちと共に自らも「没落」と「再生」を迫られます。これがいわゆる「ドストエフスキイ体験」と呼ばれるものですが、裁判員制度によって裁判員に選ばれた人たちが体験しつつあることとは、図らずも正にこの「ドストエフスキイ体験」に連なるものと考えられるのです。

★裁判員制度が始まったことは私も知っていました。しかしそこに展開していることが、具体的にどのようなものであるかは知りませんでした。しかしO君たちの報告のお陰で、私は日本においては今や殆ど不可能となった「ドストエフスキイ体験」が、このような規模と質とで、日本の裁判制度の真只中で進行しつつあることに愕然としました。裁判という場で、日本人の意識を深化させ、そして魂の根源的な変革に導き得る「静かな革命」が起こりつつあるのです。ドストエフスキイが播こうとした「一粒の麦」が、司法界の人々の努力で、日々日本の地に播かれつつあるとも言えるでしょう。

★O君とその友人のS君と私とはここ数年、『カラマーゾフの兄弟』をコツコツと読み続けています。ドストエフスキイ世界とは、殊に『カラマーゾフの兄弟』とは、O君やS君が関わる裁判員制度と深く連なる問題を含んでいるのです。つまりここでは「裁き」ということが、二重の意味で非常に大きな役割を演じていて、我々三人はこの問題に焦点を絞って検討をしてきたのでした。

二重の「裁き」—— その一つは、人間が犯す「犯罪」に対して、国家が法律に拠って執り行う「裁判」です。もう一つは、「聖なるもの」への離反・叛逆に行き着かざるを得ない人間の俗性、その「罪」に対して神が人間の良心を通して行う「審判」です。『罪と罰』から始まって『カラマーゾフの兄弟』に至るまで、ドストエフスキイ世界とは、これら地上の「裁判」と天上の「審判」という二つの「裁き」が複雑に交差し合い、そこから神の究極の「赦し」と「救い」の可能性が探られてゆく世界だと言えるでしょう。殊に天上の「審判」の問題は、キリスト教に馴染みの薄い我々日本人にとっては、なかなか理解し難いところであり、日本人のキリスト教理解において、またドストエフスキイ理解において、一つの致命的な障害となってきたのでした。

ドストエフスキイ世界と聖書世界の根底に存在する問題、「聖なるもの」と「俗なるもの」の問題について、これを理解する上で最も参考になる書物の一つはR.オットーの『聖なるもの』でしょう(1917、岩波文庫他)。「ヌミノーズ」^{アボリア}という概念

を導きとして、「聖なるもの」「超越的なもの」が地上世界に顕現する諸相を分析・検討するオットーの書物は、この概念に慣れるまでは、やや読み難く感じられるかもしれません。しかし西洋の哲学・宗教思想の頂点に立つ書物の一つとして、是非取り組むことをお勧めします。ドストエフスキ研究会も長い間、これを必読の書として取り組み続けてきました。

★O君やS君たちが追跡・検証してきた裁判員制度において、他の市民の「犯罪」に触れた裁判員たちが直面させられるのは、具体的な社会的・人間的背景と原因から引き起こされた「犯罪」であり、それに対する法に則した「刑罰」であることは言うまでもありません。しかしドストエフスキ的な角度から言うと、裁判員の人たちはそれと重ねて、もう一つの「罪」と「審判」の問題をも体験している可能性が少なくないのです。彼らが一様に語る「普通の場合とは違う」という、人を裁く場が与える重圧感と違和感。時に「トラウマ」のようにその人の心に重くのしかかり続ける「精神的・肉体的負担」と「不調」。また「想像を超えるほどの凄惨な証拠」が与える衝撃——これらはそのままドストエフスキ世界において、登場人物たちが追い込まれる「罪」と「審判」に関わる限界状況の表現に他なりません。日本人は今まで明確には自覚しなかったドストエフスキ的「罪」と「審判」と「赦し」と「救い」の問題に、裁判員制度を介して触れつつあるのだと考えられるのです。正に魂の「静かな革命」です。

★O君やS君との『カラマーゾフの兄弟』の講読はまだまだ続くでしょう。拙速は避け、時間をかけ、カラマーゾフの世界と裁判員制度との係わりを考え、また「審判」と「裁判」という二つの「裁き」の問題を検討し、西洋と日本の宗教的感性の異同についても考えたいと思っています。その報告は私からもさせていただきますが、何よりも未来を豊かに孕む若い二人からの報告として、やがて皆さんに提示されることでしょう。

(この項 了)

予備校 graffiti ⑫

S君を凍りつかせた「市民の冷たい眼」

★S君は大学時代から二十年近く、⑪で紹介したO君の友人として行動を共にしてきました。私が特に強くS君に関心を惹かれるようになった切っ掛けは、彼が大学院に進もうとする際に示した熱意でした。物静かな彼が、私の目を正面から見つめ、大学院に入り、人間と社会について更に腰を据えて考えてみたい、それまでのSTATESMANの活動から得た体験、人間と社会とが持つプラスとマイナスの両面を、より確かに明らかなものとし、それらをこの頭と心に収め直したいと言うのです。

★その熱意に応えるべく、私は暫くの間、或る校舎での授業を終えてから、S君の大学院入試に備えた英語の勉強に協力をすることにしました。毎回全力で予習をした上で、約束の時間通りに現れるS君が、喫茶店での英語講読が終わると、礼儀正しくお辞儀をして帰ってゆく姿は実に清々^{すがすが}しいものでした。折しも起こったアメリカでの9・11事件。この時S君は事件直後のブッシュ大統領の演説を、まずは原文のまま全て暗記していました。テロリストに対するアメリカの対応に対し、ただemotionalな賛否を表明するのではなく、まずは対象を冷静に分析しようとしたのです。暗記・暗唱とは、今までも何度か紹介してきたように、私が受験生に課す大切な学習の一方法ですが、S君の場合は、大学院における研究姿勢の準備も兼ねてのことでした。聖書からの引用をちりばめたブッシュ大統領の演説は、その後のイラクに対する武力侵攻と相俟って、アメリカにおける宗教と政治の関りについて、そのプラスとマイナスについて、S君に強い衝撃を与え、格好の思索の素材を提供したのです。大学院入試の結果は、このような真摯な姿勢と努力がそのまま実を結び、見事なものとなって現れました。

★大学院（文学部・社会学科）での猛勉強と並行して、S君はO君たちと、先に紹介したSTATESMANの活動の一環として、彼が住む東京近郊の町の市議会に、若い女性議員をトップ当選で送り出すなど、社会改革への実践活動に更に積極的に乗り出したのです。ところが勉強と活動とを順調に進めていると思っていた矢先、S君からの連絡が途切れました。思い悩む所があり、勉強からも活動からも距離を置いた生活が続いていることが判明しました。心配でしたが、私はあの真摯な青年が自分から言ってこない以上、余計な事は言わずに待とうと思いました。

★二年余が経って、S君が或る校舎に私を訪ねてくれました。落ち着いた表情と物腰は変

わりません。むしろその視線は以前よりも奥行きを増し、私を超えて更に遙か向こうを見つめる視線になっているように感じられ、驚かされました。静かに彼が語ってくれた、数年間の沈黙の原因は以下の通りです。

★S君たちの市民活動において、チラシを地元の家々に配布して歩くこと、また一定期間ポスターを壁や塀に貼らせて欲しいと依頼して歩くこと、これらが彼らのルーティーンの一つでした。ところが訪問先でその依頼をするや、相手の人がまず決まって示す顔の表情に、彼は「負けてしまった」と言うのです。それを「迷惑そうな表情」だとか、「胡散臭そうな表情」だとか、「小市民的な小さな表情」だとか、様々な言葉で言い表すことは出来るでしょう。ところがS君は、これらのどの言葉を用いてもまだ表現し切れない「何か冷たいもの」に自分はぶつかってしまったと言うのです。これは先に記したように、そもそも彼が大学院に進む際に既に見据えていたものだったのですが、この時私は、S君がいよいよ人間と社会の「病」そのものと直面し、それに目と心とを釘付けとされ、身動きが出来なくなってしまうていたのであることを知りました。しかし私の前に姿を現したのは、今やその「病」を正面から見据え、それと戦う若者S君だったのです。

★どんな政治・社会分析の書もなかなか捉え切れない、そしてまた表現し切ることのない「何か冷たいもの」、人間と社会の内に潜む「病」のリアリティ。この時S君と私とは、彼が一時「負けてしまった」この「病」を、改めて「市民の冷たい眼」と表現し直しました。そしてこれからS君自身が、これについて更に分析を加え、自分自身の言葉で明晰に表現することが新たな課題であることを確認し合ったのでした。

★先の⑪で記したように、その後S君はO君と共に、日本で導入された裁判員制度と十年間にわたり取り組み続け、この制度が日本の司法制度に如何なる新たな役割を果たすことになるのか、裁判員に選ばれた一般市民の内面に如何なる影響を及ぼすに至るのか、これらについて綿密な追跡調査を続け、その報告を出版するに至っています（上述書、3ページを参照）。「市民の冷たい眼」が、この裁判員制度と出会うことによって、果たしてどのように変わるかという問題と、彼は向き合い続けてきたのです。

★S君の報告は、一人の平凡な市民が突然裁判員に選ばれ、戸惑い躊躇いながらも裁判所に赴き、それまで全く知ることもなかった他の市民が犯した犯罪について、またその背景や事情について詳細に知らされ、最後にはその犯罪者に対して刑罰をも課すという役割を負わされる経緯について正確に整理をし、この体験が人間の心に如何なる影響を及ぼし得るかについて、そのプラスとマイナスを客観的かつ冷静・緻密に追い、その見事な報告を提示しています。かくも長い間「市民の冷たい眼」を問題としてきたS君にして、これは初めて出来る作業であると言えるでしょう。

★S君たちの報告は、私に「近代医学の祖」と言われるギリシアのヒポクラテスの臨床報告を思い出させます。一人の患者が病を得て死に至るまでの経緯を、ヒポクラテスは淡々と冷静かつ正確に記すのですが、その徹底的に客観的な記述が、人間の命が示す闇と光とを見事に捉え、当時のどのギリシア悲劇の傑作にも劣らぬ臨場感を持った人間ドラマを創り上げているのです。ヒポクラテスの臨床報告と重ね、私はあの「市民の冷たい眼」に一度「負けてしまった」S君が、その「冷たい眼」を彼自身の冷静な眼で見据え続け、ただその否定性のみでなく、その更に奥に秘められた肯定的可能性にまで行き当たったことを確信しました。O君と共に続ける『カラマーゾフの兄弟』の講読は、更に彼の思索を深めるに違いありません。

★現在S君は、様々な会社の社員に対して、仕事への、会社への、そして他人への対し方の基本を教え込むという仕事に就き、日本の各地を飛び回っています。彼が報告してくれる若者たちの現実、日本の未来が必ずしも明るいものではないと感じさせます。しかしS君が彼らに向かう姿勢は、決してただ悲観的な色で染まっただけではなく、落ち着いたリアリズムに貫かれたものです。あの十年近くにわたる「市民の冷たい眼」の体験と、その後のこれも十年にわたる裁判員制度との取り組みが、そして奥さんとお子さんとの作り上げつつある家庭が、彼を芯の強いリアリストに、そしてユーモアも湛えたロマンチストに創り上げたのです。

(この項 了)

音楽を愛する若者たち、そしてドストエフスキ

毎回「予備校 graffiti」の中間部では、あるテーマの下に、数人ずつの若者を紹介しています。第一回目は若者の「海外体験」について、第二回目は「病」についてでした。今回は「音楽」に関連して三人を取り上げたいと思います。

私は自分が何らかの関心を抱いた人には、その人が最も興味を抱いているものについて教えてもらい、時間が許す限り、その人と同じ体験をしてみようと試みます。好奇心が強いのです。長い間に若い人たちが紹介してくれたものには、アガサ・クリスティの推理小説や村上春樹などの現代小説から、様々なコミック類や写真集があり、中でも多かったのは「音楽」でした。それらはビートルズやエンヤから、ジャズや鬼太鼓や津軽じょんがら、ちあきなおみや中島みゆき、更にはマーラーやシェーンベルクに至るまで、ジャンルは多様であり、時には私の感受性が受け付けないものもあって苦勞をしましたが、若者の心を魅了する音の世界に肌で触れることができ、かけがえのない体験でした。

若者の心を魅了する音の世界 —— 私はそれらとの付き合いから、何が彼らの琴線に触れ、その内に渦巻く情熱、喜びや怒りや孤独を掬い取って表現しているのか、その一端に触れたように感じています。また若者はその感動の中で、自らの^{アイデンティティ}独自性と^{インディペンデンス}自立性を、そして^{パーソナリティ}個性を育ててゆくのだということも、ある程度は理解出来たように思います。しかし多くの場合その感動が、彼らを束の間主観的な自己完結の世界に閉じ込める感傷的陶醉でしかないと感じさせられたことも事実です。それが若者の音楽への熱中というものだ、「はしか」のようなものだ、それでいいのだということも出来るのですが……

音楽への感動と熱狂と、束の間の主観的感傷的陶醉 —— これらを敢えて相対化し、自らの魂を更に奥行きのある「成長史」の中に置いて捉えようとする。これは困難な作業であり、このような角度から切り込まれると、多くの人は一人一人の聖域たる感情世界に土足で踏み込まれたように感じる人が多いようです。しかしこのような「成長史」、敢えて言えば厳しい「求道的」視野の内に自らを曝すことこそ、「閉じた魂」が「開かれた魂」に変貌を遂げ、個人的感情の絶対性という狭い枠から自らを解き放つことではないでしょうか。ここでは敢えてこのような厳しい(若い人たちの言葉では「ウザイ」)視野に立って、音楽を愛し「求道的」に生きる三人を紹介したいと思います。

(A) 音大生Kさんとバッハと聖書

★Kさんがドストエフスキ研究会を訪ねてきたのは、彼女が大学を卒業した直後のこと、研究生として専門の声乐に更に打ち込む態勢を整えている時でした。参加を希望する理由として、Kさんが私に語ったのは、次のようなことでした。

「声楽の分野で、私たちがよく取り上げるのは、バッハのカンタータや受難曲、またミサ曲やモテットなどで、これらは皆キリスト教と密接に結びついた宗教曲です。でも私たちは、クリスチャンの方を除けば、聖書など殆ど読んだことがありません。それなのに神やキリストを讃美する宗教曲を主要なレパートリーに組み入れていて、ラテン語の聖句を用いた歌詞の意味も分からず、それに平仮名のルビを振り、大きな声で歌い続けています。これは正直苦しく、聴いて下さる方たちにもバッハにも申し訳ないと思うのです。」

「先生のドストエフスキイ研究会では、ドストエフスキイの作品を読むにあたって、その背景・土台となっている旧約新約聖書も同時に読み進めているとお聞きしました。今までドストエフスキイも聖書も殆ど読んだことがない私ですが、しばらくこちらに参加させて頂き、学ばせて頂けないでしょうか？」

★ドストエフスキイ研究会に参加を希望する人の中で、これほど明確な状況判断力と自己認識力・自己批判力を持ち、これほど学びへの熱い動機を持つ人はさすがにそういません。Kさんの希望を満たす講義は、どの音楽大学にも存在すると思いましたが、とも角私はKさんを喜んでメンバーとして迎え入れたのでした。

その後Kさんが聖書とドストエフスキイと向き合い、そこで学んだことがKさんの心に如何に大きなインパクトを与えたか、このことは傍で見えていても明らかでした。殊に彼女と聖書との出会いの例を、以下に二つほど挙げたいと思います。

★新約聖書の冒頭には「マタイ」と「マルコ」と「ルカ」、そして「ヨハネ」という名が冠された「福音書」が四つ連なっています。これらは皆、マタイやマルコなどの福音書記者たちが、それぞれ独自の視点から編集した「イエス伝」です。イエスが十字架上で磔殺されてから三十年以上の年月が経っても、その生と死の衝撃はますます強いものとなり、人々はこの人物とは一体誰であったのか、一体彼は何をなしたのかを改めて問うに至り、パレスチナ各地でイエスにまつわる伝承や語録が集められ、次々とその伝記が編纂されることになったのです。それゆえイエスという存在について、その言葉と行動について我々が取り上げて考える際には、それがどの福音書の報告するイエスであり、その言動であるかについて、ある程度の区別をしない限り、曖昧で恣意的なイエス像しか結べない危険性もあるのです。

★新約聖書学とは、この問題を様々な角度から厳密に検討し、出来る限り正確な歴史的イエス像の構成を目指す学問ですが、私が注目してきたのは、主観的な感想かも知れませんが、バッハという作曲家が、そしてドストエフスキイという作家が、どの聖書学者にも劣らぬほどに聖書を深く読み、どの聖書学者にも劣らぬほどに深く豊かなイエス像を探り当てた人たちであるということです。バッハの主な受難曲は

「マタイ受難曲」と「ヨハネ受難曲」ですが、バッハがこれら受難曲を、如何にそれぞれの福音書の深い理解の上に構成し創り上げたか、ドストエフスキもまた、それぞれの福音書を如何に的確に深く読み込んだ上で、その作品中に用いているか、これらは驚くべきものがあります。「ヨハネ受難曲」をこよなく愛するKさんは、これらの事実を知って、しばらくは呆然としていました。

★もう一つの例はイエスの母マリアのことです。Kさんが何よりも驚いたのは、西洋のキリスト教世界で「聖母マリア」として崇められ、場合によってはイエス・キリストよりも広く熱烈に崇拝されているとさえ思われるマリアが、福音書世界の現実においては、息子イエスの言動を理解し切れぬ母であり、息子イエスから叱責さえされる存在であることを知った時でした。つまり福音書世界の「生母」マリアが、キリスト教世界の「聖母」マリアとなるまで、そこには如何なる歴史があり、人間の宗教的認識のメカニズムが働いているのか、そう容易には説明のつかない問題が存在することをKさんは知ったのです。Kさんは常識の上に胡坐をかく怠惰さの危険について、また「アヴェ・マリア」を始めとして、自分たちが歌う宗教曲についての理解の浅さについて、改めて愕然とさせられたのでした。

★様々な事情で、Kさんがドストエフスキ研究会に参加したのは一年足らずの間でした。しかしKさんの聖書との出会いについての報告は、以上で十分と思われます。後はKさん自身が、自らの学びの体験を基に（その後海外留学をしたとの噂も聞きます）、やがて何時の日か、自らの言葉で、そして何よりも彼女自身の歌唱で、私たちに報告をしてくれることでしょう。

（B）ドストエフスキとベートーヴェンから響いてきた「声」

★Yさんの年賀状はユニークです。毎年、彼女が書いてくることは二つ。一つは、今ベートーヴェンのピアノ・ソナタの何番を弾いているか。もう一つは、ドストエフスキのどの作品を読んでいるか——これら二つの報告です。Yさんはひたすらこれら二人に的を絞り、生活を送っているのです。

★だからと言って、Yさんが世離れた「聖女」というわけではありません。生来の激しい気性が内に脈打つ彼女は、学生の頃から何にでも積極的にぶつかってゆき、ベートーヴェンに耳を傾け、ドストエフスキを読み、友人たちとベルクソンに取り組み、また公害問題に取り組み、ドストエフスキ研究会では誰にでも遠慮なく議論を挑み、正に情熱の爆発体のような女性でした。

★持ち前の生命力と好奇心を燃やし、あらゆる対象に積極的にぶつかってゆくこの情熱の爆発体にも、むしろそうであるからこそ、決定的な危機が訪れました。大学生の頃、熱烈な恋愛の末に彼女は学生結婚の道に突き進み、お腹に赤ちゃんを宿すに至ったのです。このことを知った彼女は、さすがに尻込みせざるを得ませんでした。強く憧れていた大学院での勉強の道を閉ざされ、勉強どころか育児に縛られてしまうことは不可避だったのです。

★後にYさん自身が語ったところによると、この戸惑いと混乱の中で、彼女は改めてドストエフスキイとベートーヴェンにぶつかっていったのだそうです。青春の情熱をぶつけ、「認識」と「力」の源泉であったこの二人から、今自分に如何なる声が響いてくるのか、彼女はじっと耳を傾けたのです。響いてきた答えは一つ、まずは結婚生活と育児とに正面からぶつかるのだという声でした。

★彼女は言います —— 私が戸惑い、尻込みをし、この二人に行くべき道を問うたこと自体が、既に自分のことしか考えない醜い行為だった。それは新たな生命を与えられた赤ちゃんに対する裏切りであり、「犯罪行為」とも言うべきものだった。しかしドストエフスキイとベートーヴェンは、一度死んだ私の命を、そして赤ちゃんの命も復活させてくれた。

★それから三十余年、お子さんを女手一人で育て上げる一方、Yさんの情熱は一貫してドストエフスキイとベートーヴェンに注がれ続けてきました。この二人との取り組みを報告し続ける彼女の年賀状は、ありきたりの新年の挨拶状ではありません。ドストエフスキイとベートーヴェンから彼女に響いてきた声、それが今も響き続けることを伝える報告書であり、今年もこの二人に導かれて生きてゆくとの宣言書でもあるのです。三十余年前に響いてきた「声」、Yさんはそこに究極の音楽を聴いたのではないかと私は思っています。

(C) 調律師P君が聴き取った世界の「不協和音」

★ピアノ調律師のP君は、その仕事と如何にも似合う物静かな人で、私は彼が声を荒げる場に居合わせたことがなく、また想像さえ出来ません。私の部屋には彼が毎年暮れになると送ってくれるカレンダーがあって、これには世界の著名な音楽家の写真が載り、主要な作曲家の生年月日が記されているのですが、調子が出ない日、私はこのカレンダーを見て、例えば今日はベートーヴェンの誕生日だと分かったら、彼の曲の一つ選んで聴くなど、これによって生活に変化と潤いを与えて貰っています。P君は私の心の調律師でもあるのです。

★しかしP君は一步間違えば、天職と言うべき調律師の仕事とは全く無縁の人生を送っていたかも知れませんでした。大学の最終年度、既に彼は或る大手の家電量販店に就職が内定していました。ところがギリギリの時点で、彼の内から「声」が響いてきたのです—— 何にも代えがたい音楽、殊に大好きなピアノを離れて、自分は本当にこの道を行ってしまってよいのか？ 誰もが人生の岐路、重大な決定に当たって感じる戸惑いです。そしてこの戸惑いの中から、P君に「声」が臨んだのです。

★P君が最終的に選んだのは、浜松の或るピアノ製作会社での研修の道、調律師への道でした。ご存知の方が多いと思いますが、日本経済の高度成長期に爆発的に売れたピアノも、当時既にその売れ行きは伸び悩んでいました。そして今ではピアノの下取り会社が、テレビ・コマーシャルを盛んに打つ時代になってしまいました。このような状況が視野に入りかかっていた時、ピアノの調律師として生きてゆこうというのは、少なからぬ冒険でした。しかしP君は言いました。

「この道を行います。

ポリーニの調律師になる力を身につけます」

いつもの静かで落ち着いた声でした。しかしそれは毅然とした響きでした。正にこの選択こそ、P君の調律の「仕事始め」だったと言うべきでしょう。

★あれから二十年。予想通りの逆風が吹く中で、P君は着実に仕事をこなし、着実に実力を身につけてゆきました。今は完全に私の音楽の師である彼は、素晴らしい演奏家を見つけると私に教えてくれ、また二人が共に大好きなピアニストのポリーニが来日する時には、なかなか入手の出来ない切符を買いに走ってくれます。殊にグレン・グールドの素晴らしいピアノの音、そのバッハ演奏に私の耳と心を啓かせてくれたのはP君で、私はいくら感謝してもし切れません。

★先日P君と神田の古書店街を歩いた時のことです。彼は改まった顔で、『カラマーゾフの兄弟』を少しずつ読んでいると語り出しました。大学での四年間ドストエフスキイ研究会への出席を続け、卒業旅行の際にはペテルブルクを訪れ、ドストエフスキイの墓詣でまでし、見事な写真を撮ってきてくれた彼です。ところが申し訳ないことに、P君を専ら音楽の師だと考える私は、彼と会っても音楽のことばかりに話題を向けていたのです。その私に優しく調子を合わせてくれていたP君は、しかし神田でこの時、正面からドストエフスキイのこと、『カラマーゾフの兄弟』のことを話題としてきたのです。

★P君は新聞の切り抜きを一枚取り出しました。そこに記されていたのは、或る幼児虐待の話でした。新聞に報道されない日はない、現代の悪魔的悲劇です。彼は強い口調で切り出しました —— 親の「病」のために、罪もない子供が暴力の餌食となり、命まで奪われてしまう。こんな親は絶対に赦すことが出来ないし、こんな親を生み出す社会も赦せない。改めて『カラマーゾフの兄弟』を読んで、次男のイワンが弾劾する現実、つまり世界に満ちる「罪なくして涙する幼な子」の現実について考え始めた。そして親の「病」とは何か、社会の「病」とは何かについて、そして幼な子たちへの「癒し」ということについて考えている。

P君の心に、子供にとって愛の源泉であるはずの親と社会から発される、暴力という「不協和音」は醜く、赦し難いのです。もの静かで落ち着いた彼から、このような激しい怒りの言葉が発されることは驚きでした。ここまで現代社会の「病」は、抜き差しならぬところに来てしまった —— 私はP君の怒りを介して、このことを痛感させられたのです。

★改めて思いました。就職にあたって、彼の内から響いてきた「声」とは、ただ単に彼に音楽の世界に留まれ、愛するピアノから離れるな、そしてこの世界で正しい音を守り続けるのだという、音楽の神様からの呼び声だけではなかったのだと。その後P君は調律師という仕事を通して、ピアノを通して、そして音楽を通して、その心の更に奥深くから響いてくる呼び声を聞くに至ったのです —— この地上世界から「罪なくして涙する幼な子」をなくせ、子供たちの喜びの声を響かせ続けよとの。P君が聴いたこの呼び声こそ、先のYさんにドストエフスキイとベートーヴェンから響いてきた声と同じく、究極の音楽というものではないでしょうか。

★私は以前P君に、バッハのカンタータを勧めたのですが、彼は既にその全二百余曲を或る全集版で手に入れていて、これとの取り組みも少しずつ始めたとのこと。『カラマーゾフの兄弟』との取り組みと、カンタータとの取り組み —— 世界の内に聴き取った「不協和音」を向こうに置き、P君はこれら二人の巨人との取り組みから、如何なる絶対の調和音を見出すのでしょうか。ドストエフスキイ研究会での勉強が、二十年後の今、更に広がりを加え、新たに開始されたのです。

(この項 了)

予備校 graffiti ⑭

－ T 君と、母の死を超えた「永遠の生命」－

★前回⑥で紹介した K 君の場合、その人生の岐路となったのはメキシコでの辛い体験と親子喧嘩であり、そこにはお父さんの存在が大きな位置を占めていました。今回紹介する T 君の場合はお母さんであり、しかもその死が彼の人生の決定的な転換点となったのでした。

★浪人を終えた T 君は、ドストエフスキ研究会に参加しました。ある日研究会が終わってからのことです。思いつめたような表情で彼が私に話しかけてきました。しかし話題は様々な方向に飛び、口下手な T 君の話はどれも要を得ません。いつの間にか二人の乗った電車は、私が降車する駅にまで来てしまいました。駅前の喫茶店に入り、続けて話を聞いている内に、私には T 君の話のベクトルが全て、高校時代に亡くなられたお母さんを指していることが明らかとなってきました。

★私の人生の決定的な転換点も家族の死でした。それ以降、死を超えた「永遠の生命」を掴むこと、これが自分の生涯の課題となったことを、私はドストエフスキ研究会でしばしば語ります。「神と不死」の問題こそ、ドストエフスキ世界の中心テーマに他ならないからです。T 君の場合も、私と同じ問題を巡って心の中に嵐が吹き荒れていたのです。亡くなられたお母さんを自分の心の内に再獲得すること、お母さんの死を超えた「永遠の生命」を実感し、自分のものとする——これが混沌の内に彼の心が向かっていることだったのです。私は、是非彼に頑張ってもらいたい、ドストエフスキこそその答えを与えてくれる人であり、この研究会は正にその永遠のテーマを皆に本気で追及して貰う場であることを説明しました。T 君は深く納得し、帰ってゆきました。

この問題については、「研究会便り」中のサイト；「ドストエフスキの肖像画・肖像写真・7－死を超えた「永遠の生命」－」も参照して下さい。ドストエフスキの子供二人の死と、その死を超えた「永遠の生命」の問題が、『カラマーゾフの兄弟』において如何に重大なテーマとなったかを扱っています。

★大学で中国語を専攻した T 君は、中国語が達者だったお爺さんから薫陶を受け、その知識と力を生かし、大学卒業後は上海の或る大学に留学をしました。二十世紀末、日本が様々な面で衰退の道を辿るのとは対照的に、中国がどんどん経済成長を進める現場を

彼は数年間身を以って体験し、中国語も更に brush up して帰国したのでした。新しい世紀の始まりと共に大学院にも進み、そこでは神秘主義思想家ベーメを専門としドストエフスキイをこよなく愛する私の友人も教鞭をとっており、ここでT君は中国におけるドストエフスキイ受容の歴史を研究することになりました。

★T君の中国語についてのエピソードも一つ記しておきましょう。帰国後に再び加わったドストエフスキイ研究会で、ある日の集まりが終わり、帰りがけにメンバー数人が、新宿西口ガード近くの中華料理店で食事をした時のことです。彼らの報告によると帰り際、中国人の店員さんとT君との間で、会計のことで諍いが起こり、二人の口論は喧嘩に近い猛烈なものとなってしまいました。後で判明したところでは、その原因は、流暢な中国語で抗議するT君のことを、自分と同じ中国人だと思い込んだ店員さんが、これに負けまいと激しく大声で捲し立てたからだったそうです。T君の中国語は、この後彼を大いに助けることになるでしょう。

★T君は大学院を出た後、厚生労働省で中国残留孤児問題の仕事に携わり、今は持ち前の語学力を生かし、「フリーター」として中国関係の翻訳や通訳の仕事をする傍ら、四十歳を超えた今もドストエフスキイを読み、様々な絵画と向き合い、勉強を続けています。河合文教研のHPで、新しい「ドストエフスキイ研究会便り」がアップされると、誤植の発見から内容のコメントに至るまで、直ちに反応をしてくれる一人がT君です。

★お母さんの死を超えた「永遠の生命」を確かに掴むこと。これは長い時間のかかる課題です。世間の多くの人々の価値観からすれば、このような問題にT君が^{こたわ}拘り続けることは「閑人^{ひまじん}のすること」と受け取られかねず、「永遠のマザ・コン」というような陰口さえ招きかねません。中国語は達者ですが、日本語を喋るT君はかなり口下手で、気持ちの落ち込み方も激しく、一たび落ち込むと、なかなかそこから抜け出ることが出来ません。しかし肉親や知人の病や死や誕生のような身近なことの中にこそ、我々の生涯を貫く meta-physical な課題や思索のテーマが存在するのであり、T君はその課題と正面から向き合い続けているのです。「閑人」「マザ・コン」という批判は全くのお門違いです。

★一たび「何か」を掴んだ時、T君から生まれ出るコトバは真に力あるものとなることでしょう。周知の如く3・11の大震災・原発事故で多くの人たちが母親や父親や親族・友人、そして故郷を失ってしまいました。その人たちの心に本当に寄り添い、励ましのコトバを発することが出来るのは、マスコミやジャーナリズムの場で訳知り顔に多くを語る人たちではなく、T君のような課題を抱え、社会の片隅で一人黙々と不器用に、その課題と向き合い続けている人に違いないと私は信じています。

(この項 了)

予備校 graffiti ⑮

「てっちゃん」の冒険

★「てっちゃん」と私とは、お互いがそろそろ会いたいなと感じる頃、自然に連絡し合って散歩をする仲です。二十年以上前、彼が報告してくれた言葉の一部を纏めて記してみましょう。当時の彼の生活が、生き活きと浮かび上がってくるように思われます。

「この半年はカナダの山奥で測量のバイトをしていました。素晴らしい自然だったけど、熊に出くわした時はさすがにヤバかったな」

「次に備えて、今は西武のビブロスで本の予約のバイトです」

「やっぱり屋外で働くのがいいから、今度は九州へ測量の仕事に出かけます」

「先生の田舎の町でもアルバイトをしたことがありますよ。富士山や箱根山からの水がどんどん湧き出てきて、水がきれいな町ですね」

「今度はワーク・ビザをとって、ニュージーランドに行ってみます」等々等々

★私はよく授業で、「三十歳までは勉強と冒険に賭けなさい。大企業に就職するためには、浪人も二浪までが限度だなどと考えたり、二十三・四歳で大企業に自分を嵌め込もうとするよりも、親に頼らず自力でバイトをし、自力で語学を身につけ、世界中を旅して歩いたり、留学をしたりすることだ。二十代で自分の本当の‘使命’を見つけることが出来れば、そしてその‘使命’に向けた努力を始めれば大成功だ。そういう所から自分を創り上げて、堂々と自分を売りなさい」——このような趣旨のことを話します。

「てっちゃん」は、私が言うまでもなくこのことを自ら実行し、自分自身で自分の人生をユニークに構成してきた、数少ない人物の一人なのです。

★彼のご両親は息子のことをよく理解されている一方、当然のことながら心配もされ、

「病気になったら誰が保証してくれるのだ?!」と折りあるごとに、確かな所に身を落ち着けるよう勧められたようです。しかし彼は私に、頭を掻いて言うのでした。

「その‘保証’というのが問題で、これを求めたら、俺、不本意な形で身売る事になっちゃうんですね」

「まあ当分は、俺、このままプータローで行きます」

★いつの間にか「てっちゃん」も五十歳台になりました。彼を深く愛する女性も現れて

くれ、相互の理解の下に互いの自由を尊重し合い、互いのペースで仕事をし、山登りを中心に落ち着いた共同生活を楽しんでいます。数年前に会った時にも、夕方になると、彼は「今日の夕食、俺の当番なんです」と言って、いそいそと買い物に向かったのです。楽しそうで、実に幸せそうな後ろ姿でした。少子化を危惧する政治家にとって、彼らは「非国民」でしょう。しかしどちらが人間として立派なのか・・・

★彼は海外も好きですが、特に江戸時代の古地図を愛し、現代の東京を江戸と重ね、想像力を働かせながら街歩きをするのが大好きです。私を誘い出し、「先生このドブ川は、昔はあそこの泉から流れ出ている、澄んできれいな川だったんですよ」とか、「この川と崖は縄文時代からのものです」とか、「この路地は猫たちがいい!」とか、実に楽しい散歩の時間を創り出してくれます。‘ブラ・タモリ’どころか‘アース・ダイビング’の元祖でしょう。つい最近も私を川越に連れて行ってくれ、「昔はこんな所にまで江戸湾が広がっていたんですよ」と、古代の海岸線を教えてくれ、また川越の薩摩芋を食べるという私の長年の夢も叶えてくれました。古代江戸湾の広がりを知りたばかりか、私が「芋」だということも、彼はとっくに見抜いているのです。

★バブルがはじけた時にも、またその後の長い不景気にも彼は動じませんでした。「もともと俺、貧乏だし、バブルなんてものも関係なかったし、この不況も関係ないです」——これは或る年の年賀状の言葉ですが、大正解と言うべきでしょう。「てっちゃん」を見ていると、何かあの柴又の寅さんの **new version** を見ているような思いにさせられます。誰か映画監督になって、「てっちゃん」シリーズを作りませんか?!

★「てっちゃん」の心の底に流れるもの。それは人の命と自然への尽きない興味と優しさ、そしてその優しさを一人ででも守り通そうとする芯の強さだと私は思っています。その彼は長い放浪の旅が一段落して、ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』も読了し、自らも見事な小説を一つ書き上げ、更に詩やエッセイとも取り組んでいます。私も長い課題だった『カラマーゾフの兄弟論』の完成・出版と、その「後産」たる一連の考察も終え、これからの散歩は今までは一味違う一層楽しいものになることでしょう。皆さんも是非、この散歩に加わって下さい!

(この項 了)

「てっちゃん」という愛称について一言。私が授業で彼のことをよく話題にしたため、またエンリッチ講座で彼に話をして貰ったこともあって、この愛称は一時河合塾で、またドストエフスキイ研究会で相当親しまれ、話題とされていました。しかしこのことを当人は知らず、恐らくこの「予備校 graffiti」を読んで初めて知ることになるのだと思います。彼のことで、自分が話題とされていたことを心外に思うでしょうが、「時効」として赦して貰おうと思います。

予備校 graffiti ⑩

— セブン・イレブンで見る「夢」 —

★以前のこと、私は或る女子大で比較文学を教え、ドストエフスキを核に、彼と同時代人の福沢諭吉やアンデルセン、ルイス・キャロルやボードレール、そしてマーク・トゥエイン等を比較考察していましたが、ここでの辛さは、折角ドストエフスキに慣れ親しんだ生徒さんたちが、卒業近くなるとドストエフスキなどは教室に置き去りにし、有名大企業に就職してしまう、あるいは強く結婚に心が向かってしまうということでした。今では、そのような人たちの心の中にドストエフスキが生き続け、いつかその人生の中で彼を必要とする時が来てくれれば十分だと思えるのですが。

★そのような中で、ある年、どうも就職する気配のない生徒さんがいました。Aさんというこの生徒さんは、予備校の夏の講習で私の授業を受けたことがあったのです。しかし変に慣れ合うことを嫌う人で、この事実を一度話してくれた後は、ドストエフスキの愛読者として、ひたすら比較文学に向かう真面目で熱心な生徒さんでした。最後の講義の後、Aさんと私との間で交わされた会話も、簡単なものでした。

「卒業後は、どうされるのですか？」

「私、セブン・イレブンです」

「ユニークな企業に就職ですね」

「いえ、そこは、私、アルバイトなんです」

★Aさんは、自分は一生小説を書いて生きてゆきたい、生活は親に頼らず、自力でやってゆきたい、だから取り敢えずはセブン・イレブンでバイトをしながら書いてゆくつもりだ —— このように何の気負いもなく語るのです。私はドストエフスキを愛するAさんが、自ら小説家となることを目指していたのだと、この時初めて知りました。落ち着いた目の奥に鋭く光るものが印象的な生徒さんでした。

★その後Aさんが文壇に登場したのか、未だ頑張っているのか、あるいは挫折してしまったのか、不明です。しかしAさんは、私がこの大学で教えた間で最も印象的な生徒さんの一人となりました。私はコンビニに入ってレジに向かう時、そこで働く若者が、日本人であれ外国からの人であれ、何らかの「夢」や「志」を持ってここで働いているのかなと想像しては、勝手に「頑張れ！」と声援を送っています。(この項 了)

予備校 graffiti ・ ⑪～⑮ ・ 余録

★今回紹介した八人の若者たちは、取り敢えず三つのタイプに分けられるでしょう。

まず⑪と⑫で紹介したO君とS君は、現代では稀なほどに社会への鋭利な批判力を持ち、しかも抜群の行動力を持つ若者たちです。「稀な」とか「抜群の」と記しましたが、二人は決して超能力の持ち主というわけではありません。彼ら自身がまずごく普通の「市民」「庶民」であり、そこから同じ「市民」「庶民」が抱える「病」を見つめ、その「病」と「病」をもたらす社会・政治に対して、誤魔化しなく戦いを挑む若者たちなのです。この庶民性と誤魔化しの無さ——ここに彼らの「力」があるのでしょう。O君とS君が日々の生活を保持するために如何に苦勞をし、その上で社会について如何に真剣な思索と行動を続けているかを知るにつけ、私はいつも頭の下がる思いがします。

以前マスコミで「ドストエフスキイと革命」ということがしばしば語られました。しかしそれもバブルの崩壊と共に、儚い言葉遊びのように消えてしまいました。ところがSTATESMANの運動に続いて、二人が追跡・検証をしてきた裁判員制度は、この「ドストエフスキイと革命」という言葉を、思いもかけなかった角度から甦らせてくれたように思われます。この制度の施行と共に、我々日本人が同じ同胞市民の「犯罪」と向き合い、その「裁き」に関わることによって、自分自身に目を向け、その小市民性・島国的閉鎖性の堅い殻を破る可能性、つまり自らも深い「病」を抱える社会の一員であることを自覚し、その「病」の克服に向けた一歩を踏み出す可能性が大きく開けてきたのです。私はこれが「魂の革命」に至る大きな変革の始まりであると感じ、タイトルに「静かな革命」と記しました。ドストエフスキイが生涯求めたものも、正にこのような「革命」だったのではないのでしょうか。

私はここに紹介した二人が、この制度を一貫して見つめ続け、それが日本社会において持つ意味の重大さを我々に知らせてくれると共に、ドストエフスキイ世界とも真剣に取り組み続ける若者であるという事実 zu 大きな意味を見出します。二人に期待するところは大きく、私もドストエフスキイ理解という面から、この若者たちに出来る限りの協力をしたいと思っています。

★次の⑬で紹介したKさんとYさんとP君は、主にバッハとベートーヴェン、そしてドストエフスキイと聖書との取り組みを核として、その人生を組み立ててきた若者たちだと言えるでしょう。しかしこれら三人の若者は、社会に関心など抱かず、ただ自分の人生を小さく趣味的に纏め上げようとする「音楽オタク」などでないことは明かです。P君の例からも明らかなように、三人はその耳と心を開き、自らと世界の内に響く「不協和音」を敏感に聴き取り、それを超えた絶対の調和音を探し出そうとする真摯な若者たちなのです。

私が強く関心を惹かれるのは、音楽を愛する彼らの心が、更にドストエフスキイや聖書への関心と結びついたこと、つまりは極めて精神的・求道的な方向に向かったことです。私は彼らが「究極の音楽」を聴いたのではないかと記しましたが、これら三人の例から、決して安易で大袈裟な結論を引き出そうというわけではありません。しかしここから一つの問題提起はしておきたいと思います。——明治以来我々日本人が西洋に学ぶ姿勢とは、「和魂洋才」という言葉で表現されるように、専ら恣意的でバラバラな文明・文化の受容だったのですが、これら三人は、ドストエフスキイを核として、芸術・思想・宗教の総合的な受容に向かう一つの可能性を示しているのではないのでしょうか？

私は自分自身の体験も含め、バッハとベートーヴェン、そしてドストエフスキと聖書を買いて存在する人間の根本的な認識構造、あるいは芸術・思想・宗教を通底する超越的認識構造について、何らかの考察を書き残しておかねばと思っています。そしてこれこそ、「ドストエフスキ研究会便り」の(1)と(2)でも記したように、西田・小出両師の思索とその作品を向こうに置き、当研究会が三十余年間にわたり最大の課題としてきたことの一つなのです。

★最後の⑭と⑮と⑯で紹介した三人は、最初の二人と較べると、社会に正面から目を向けるというよりは、まずは自らの内に目を向け、その課題とひたすら向き合う若者たちだと言えるでしょう。しかし、中間部の⑰で紹介した三人と同じく、これら三人が自らの内に向かう姿勢もまた、決して me-ism とか ego-ism 等の言葉で片づけられるような「オタク的」なものではありません。彼らが向き合っているのは、(⑭のT君のように)我々人間は死を超えた「永遠の生命」を如何に見出し得るかという問題や、(⑮の「てっちゃん」のように)、我々はこの人間疎外の社会で、如何に「自由」と「優しさ」を貫き得るかという問題や、(⑯のAさんのように)、自らの内から湧き出る創作への願望を如何に、また何処まで充たし得るかという問題など、どれも皆人間が昔から取り組み続けてきた永遠かつ喫緊の問題と言うべきものです。しかも彼らはこれらの問題との取り組みを、社会的な安定を捨てたところで、たった一人でも追い求め続けようという若者たちなのです。

このような人たちを、ドストエフスキは「地下室生活者」と呼ぶのですが、彼にとりこの「地下室」にこそ、芯の強い「開かれた魂」が、そして真摯で「求道的な魂」が存在するのです。私は懐の深い奥行きのある社会、文化を育む豊かな社会とは、このように一人黙々と自らの課題と取り組む若者たちを、その懐に数多く抱える社会だと信じます。日本には今、優に百万を越える「閉じ籠り」の人たちがいると言われ、予備校にも小中高時代に「いじめ」に遭った生徒さん、或いは「不登校」の体験をした若者が少なくありません。この人たちをただ「病者」や「弱者」であるとすることは、彼らが宿す大きな可能性を無視した偏見であり誤りだと言わざるを得ません。

★最後に新約聖書の最後に置かれた『ヨハネ黙示録』から、その著者ヨハネに臨んだイエスの言葉を挙げておこうと思います。ヨハネは、ラオデキアにある教会に向けて、そしてそこを支配する微温的な精神と「行為」^{おこなひ}に対して、このイエスの言葉を投げつけたのでした。

「われ^{われ}汝^{なんぢ}の行為^{おこなひ}を知る、

なんぢは冷^{ひやう}かにもあらず熱^{あつ}きにもあらず、我^{われ}は寧ろ汝^{なんぢ}が冷^{ひやう}かならんか、熱^{あつ}からんかを願ふ。
かく熱^{あつ}きにもあらず、冷^{ひやう}かにもあらず、ただ微温^{ぬるき}が故に、我^{われ}なんぢを我^{われ}が口より吐出^{はきだ}さん。」

(『ヨハネ黙示録』三 15-16)

「微温^{ぬるき}」を口から吐き出し、「冷^{ひやう}か」であるか、「熱^{あつ}き」であるかの何れかを望む絶対排中律の精神——ヨハネに臨んだこのイエスの精神とは、そのままドストエフスキの精神であり、バッハやベートーヴェンの精神であり、今回ここに取り上げた八人もまた、我々日本人がいつの間にか陥ってしまったラオデキアの教会的「微温^{ぬるき}」の精神を拒否し、厳しい精神を生きる若者たちであると言えるでしょう。

予備校 graffiti ・ もう一つの「青春」③

小出次雄画



「恐らく小出先生は西洋の画家が描いた「聖母マリア」を基に、これを描かれたと思われます。このデッサンが 1930 年代の日付のある絵と同じ場所に収められていたことから、恐らく 1930 年代、三十歳代の作品と考えられます。そのオリジナルについては様々な推測が可能です、正確には不明です。ご存知の方はお知らせ下さい。この作品については、今回⑬の（A）に記した「生母マリア」と「聖母マリア」の問題を重ねることで、様々な鑑賞と思索の道が開かれるでしょう。」